

パドゥルズ2000シンポジウム

「アーティストインレジデンスを社会にどうつなげるか」

主催：CAS、大阪府

場所：大阪府文化情報センター

開催日：2000年12月16日（土）

司会：天野一夫（京都造形芸術大学助教授） パネラー：

アルノー・ファン・ロスマレン（TENT/CBKプログラムディレクター）、笹岡敬（CASディレクター）、松本薫（大阪府学芸員ART-EX担当）

参加者約80名

シンポジウムの進行は天野一夫氏の司会により、アルノー氏のオランダでの現代美術の状況の基調報告から始まった。

アルノー氏はロッテルダム市での「ポイマンス・ファーニンゲン美術館」、クンストハーレである「ピッテデビット」そして氏がディレクションをしているTENT/CBKの関連を説明し、それらが各々「インターナショナルな視点での作品収集」「世界の現代美術の紹介」「オランダにおける現場との連携による新しい試み」の段階で対応しているとのことであった。またCBKの基本活動である「アーティストのデータベース」「アートセンターの運営」「国際交流」「パブリックアート」「美術作品のレンタル」「アーティスト組織との連携、サポート」等をTENTのオープニングレセプションのビデオとともに紹介した。

次に笹岡が代表を勤めるCASの紹介と報告を行った。CASはアーティストを中心とする非営利組織であるが、その展覧会の方法は、運営委員会が依頼する美術館学芸員やインディペンデントキュレーターによる企画という方法が採られており、そのコンセプトの説明を行った。次に昨年参加している「パドゥルズ」の報告をビデオとともに行った。日本では、作家とキュレーター、ギャラリーや美術館、鑑賞者が各々の役割によって分断化しており、そのことで美術本来の持つ力が十分機能していないのではないかという意見がでた。また「アーティストインレジデンス」がそれらの分断化にいかにも有用に機能するのかという説明も同時になされた。次に大阪府学芸員で大阪府が企画しているアーティストインレジデンス「ART-EX」を担当する松本氏の報告があった。「ART-EX」では10年前から毎年1名のアーティストをドイツ、フランス、英国、ベルギーの何れかから招聘し、逆に1名の日本人アーティストを送るということを実施している。そこではいくつかの問題点が指摘された。日本人アーティストの招聘しているヨーロッパアーティストの条件も十分ではなく、渡航費や制作費が出ないこと。欧米のアーティストはそれでも自国の基金等で捻出できるが、日本のアーティストには困難であること。またヨーロッパにおいてはアーティストのユニオンが数々のサポートをする体制になっているが、日本においてアーティストの受け入れ組織が無い。あっても行政との連携がまだなされていない等の問題点をあげた。

このあと各々ディスカッションに入るのであるが、そのなかでアルノー氏が結論的に指摘したのは、「はっきり言えるのは、世界中で、いまだ行政主導で新しい概念を打ち立てた例は一切無い。アーティストインレジデンスに限らず、すべてのことは民間主導で行われるべきであり、行政はそれをいかにより良くサポートするのかということに集中すべきである」という意見であった。尚、このシンポジウムは大阪府とCASとの共催で行われたのだが、そういう意味ではこの企画は「パドゥルズ」を契機に立てられ、民間主導の小さな一歩を踏み出したともいえるということも、ささやかな結論であった。また、この報告書は大阪府とCASの共同で1000部出版される。

文責 笹岡敬